私が、インターンで学び・また感じたことは、大きく言って２つである他者責任は、いけないことだということを、身をもって体験したことであろう。と思っている。日本は、今、他者責任中心の社会になりつつある、例えば、少年がナイフで人を殺せば、社会が悪い、学校が悪いとか、家庭が悪いとか、他者に責任をなすりつけていく一番悪いのは、本人であるのに、他者に責任をなすりつけていくため、問題の本質が解決されない。

また、僕を含めて学生もそうだ、学校の授業のつまらないのを学校・教授のせいにする。また、教授も近頃の学生は、授業を聞かないからと、生徒のせいにする。みんなが、自分自身で責任をとれない社会になりつつあるのを感じた。

私は、日本のあらゆる問題は、他者責任・他者依存にいきつくのではないかとインターンを体験して思った。これを、思ったきっかけは、社長に、何度も言い訳をしたときだ。自分のミスを僕は、言い訳でのりきろうとして、社長に怒られて、気がついたのだ。あと、わかったことは、自分は社会で使えない人間だということだ。

ホトドギスで有名な徳富蘆花も「人は書物のみでは悪魔になり、人は労働だけでは獣になる」と言っているとおり、自分は、実際に何かをやるということだけに、価値をみいだして行動していて、机の上で勉強するということを忘れていた。実働と勉強の両立をしていかなければいけないことがよくわかった。社長に読んだほうがいいといわれた、資本論などは、読んだが、まだまだ自分が知らなければいけないことがたくさんあることに気づいたあと、一番自分のためになったことというのは、起業家ほど素敵な商売はこの世に存在しないというのがはっきりとわかったことだ。腐りきった他者責任的な日本の社会体質をかえるのも、さらに、今、起こっている複雑な社会問題を解決するシステムをつくるためのも起業家は、必要だなということがわかった。「世の中に新しい価値をクリエイトし、社会問題を発見しそれを解決してよりよい社会を作っていくのが起業家の役目であると発見した。会社勤めをして、いわれた仕事をこなすことだけでは、絶対世の中は、変わらない。起業だけが世の中を変える方法ではないが、一人、一人が、しっかりとした時代認識と社会問題を発見し、それを解決していくために頑張る、アントレプレナー精神を持つ人間が、日本の社会を変えるには本当に必要であろうと思った。

日本は、猛烈な速さで高齢化社会に進んでいる。今にすぐ国民の４人に１人が老人ではなく、３人に１人の時代がやってくるであろう。このような社会を維持することは、とても困難であろう。社会保障制度にも、すでに問題点が生じており、うまく機能しなくなってくるだろうし、かといってもう税金をこれ以上あげることはできない。このままでは、日本は、おそらくすぐに崩壊してしまうであろう。ならば、新しいビジネスが誕生すればいいのではないか、例えば、高齢者や弱者に役に立つビジネスでもいいし、それを介護するビジネスでも何でもいいとにかく、人のために何かをやろう、そのサービスをうけた人がやってくれた人に何かをやってあげようという互酬制社会的な考えが中心となっている社会を形成するようなビジネスが次々と誕生すればいいのではないか。私は起業家とは、社会を直すお医者さんだなと思っている。僕は、起業家精神をもっている人こそが、スーパエリートだと思っている。別に、さっきから言っているように、経営者でなくたっていい、人のために、何かに情熱を傾け、あきらめず、自分の人間せいを磨き続けられたりすれば、社会も変わっていくのだろうと僕は思った。

二番めにインターンを学び感じたことは生きるとは、いったい何なのであろうかという

ことが、見えてきたことだ。人間は好きなことをやって死んでいく。自分の一生であるのだからどう生きようが自分の自由であることは、否定できない。しかし、本当の満足感や充実感というのは、どのようにすれば得られるのであろうか。確かにお金があれば病気になった時も安心であるのは、確かである。しかし、お金さえあれば本当に満足に死んでいけるのか。

世の中にはさまざまな、教育機関があり、様々な問題に関して様々な事が研究されている。しかし、今日の教育においては決して楽しそうに見えない出世競争に多くの時間を費やし例えば、大学受験に代表されるようにいやな勉強を無理失理（あめとムチ）で実践されることにより丸暗記名人を作ることに力点がおかれ、また大学に入学してからは友達を作ったり、サークル活動に専念することが日常化されている。しかし、これが本当に生きるということなのか？

私は、インターンをして一番感じたことは、今日の教育では研究された結果を教えることばかりが強調され、生きるということとの関わりあいについての議論を全く軽視してきてしまったことに根本的な問題があるのではなかろうかということである。私は、人間というのは自分の考えを少しずつ、少しずつはっきりと確立して成長していく生き物だと思っている。しかし、今日の大学受験をみてみると例えば、悲しいことや苦しいことなど様々な体験をみずからが求めてするのとは逆にできるだけそういうことからは目をそむけ、ひたすら大学受験のための、まるで丸暗記によって知能だけをアップすることに片寄りすぎた教育が黙認されてきたように思われる。例えば、障害者の施設でいっしょに仕事をしたり、またボランティア活動をしたり、共同生活をすることにの中に様々な感動があり、人間が人生について学ぶのは、単に学校などの教育機関ではなく、インターン先の会社であったり、ファーストフードの店でバイトをした時であったりしてもよいはずである。

そして、世の中に反面教師という言葉があるがごとく、人間は様々な人からいろいろなことを学びながら成長していくのではなかろうか。人間の教育に対する感心は、本来本人の体験と感動の中から自然発生的に生まれてくるものと思われるが、大学受験にあけくれ心に残る体験としては受験戦争ぐらいしか体験していない今の大学生の心の中はあまりにも空洞化してしまっているのではないのであろうか。そして、大学自体も自分にあった仕事をするための楽しい努力を学生に見つけさせたり、そのための学問に対する興味をもたせることについてはやや不熱心というか、あまり得意ではないような気がする。教えるものと学ぶものの間にギャップが存在し、限られた講義の中で自分がなぜ、そして何を講義しようとしているかを熱意を持って説明し、この教えるものと学ぶもののギャップを共鳴と感動で埋める努力をおしまない教育者は、少ないと思う。

例えば、経済学では、ケインズの第一方程式、第二方程式、あるいはIS－LM曲線もそのメカニズムを学ぶ前にケインズの置かれていた経済環境を十分に理解し同じ経済環境下に自分を置き換えた時、自分ならばどうしたかを考えればケインズの偉大さが見えてくる。マルクスの資本論を読むのも悪くはないが、その前にマルクスが生まれ故郷をのドイツをおわれ、貧困の中で子供を失い頭にきてロンドン大英博物館の図書館で資本論を一気に書き上げた間の事情を調べたり、彼が宗教を貧者のオピアム（阿片）と決め付けたくだりを調べてから資本論を読んだほうが資本論がわかりやすいし、少なくとも興味をもって読むことができる。そして、こうした体験のなかから様々な興味を抱き、そのことについて学んでゆくというカリキュラムは、大学教育のみならず小学校、中学校、高等学校といった教育レベルでも少なくとも今以上に組み込まれてべきであると思う。

社会の中にある多くの楽しい努力や仕事に慣れ親しむために、小学校においては教室を離れた体験を通じて様々なことに興味を抱かせること、あるいは感動を与えることがもっともっと行われてよいと思う。また、中学校においては、ボランティア活動、特に身障者の人などあまりわれわれが気がつかない配慮や鉄がどのように作られるかといった仕組みについて現場で体験させてこそ生きた教育の基礎ができ、また学ぶ意欲のきっかけをなすように思えてならない。

発展途上国での地下水開発などはつらい仕事だが、そこには水が出た時の感動があり、いくら国際協力事業団でこうしたビデオを用意してもほとんど利用されないのは、いかにももったいない気がしてならない。

また、高校教育では自分が仕事としてやりたいことをもっと意識させるようなチャンスをあたえていく必要があるのではなかろうか。いわゆる耳学問だけでは心につうじなら体験させることも必要になってくるように思われる。橋を架けたり、ダムを作ったり環境問題や公害訴訟などに

興味をもたせることも立派な教育だと思う。大学教育については大学は宝の山であることをもっともっと認識させるべきであると思う。なぜならば、大学が宝の山と思えない学生の生活はちょうど要を失った扇のようにまったく意味をなさないように思えてならないからである。また、大学院については入学制度的にも在学中の資金的にもっともっと実務経験のある社会人が社会に貢献するために知識を体系的に学べるように改革を断行してしかるべきのように思えてならない。

そして、今日のようにメディアや通信が発達し唯物史観的にもいやがおうでも我々自身がみずからの変革を強いられている中で年齢に応じた動機付けのあり方も当然変革を強いられるであろうし、また様々な教育に関する国際的なケーススタディーについての比較検討がおこなわれるべきだと思う。

私のインターン先の社長は、アメリカのビジネススクールでアドミッション・コミュティーのメンバーを担当したことのある人なのであるが、その社長の話によると大学の学部を卒業した学生のうち実務経験のある人間がのほうが大学院の入学判定時にはアドバンテージを持っている制度になっていたらしい。このことは、アドミッション・コミッティーのひとつの目的が様々の経験を有した人間によってクラスを構成することにより各人が他のクラスメートからも多くのことを学ぶようにクラス編成をすることに起因していると言っていた。ベトナム戦争の経験者、マイノリティーと呼ばれる少数民族出身者、皮膚の色、男女比率などが検討されていた上で各人が他のクラスメートを触発し、またおたがいに貢献しあえるような形でのチームが構成されることになる。また、こうしたことから学期末の成績評価時においても、クラス・コントリビューションというのが評価対象になるらしいたぶん、その講義で当該学生が何回発言し、その他の学生にとってどのような貢献をもたらしかということに、成績の点数の力点がおかれているのであろう。授業中,教官は学生に対し、必要以上に、ANY QUESTION OR COMMENTSという質問を繰り返すらしい。そして、どうも教官の説明がわかりにくい学生が多い場合に、また、ある生徒の質問もしくはコメントがわかりにくい理由を鮮明にし、他の学生もその質問もしくはコメントにより問題の所存を明確に把握できるようなことになれば、その生徒のクラス・コントリビューションにアドバンテージが与えられるらしい。私は、この話を聞いて単に教育とは教えるだけではなく学生がみずから学ぶことを指導するリーダーとしてのもう一つの教育者像がある必要がなければいけないと思った。

このあいだ、どこかのテレビで世界のユニークな教師という番組を見たがこの中では、トランプを使って教えるユニークな教育方法などがいくつも紹介されていた。また、その中で極端な例であろうが僕がユニークだなーと思ったものがあった。それは、ボストン刑務所の中で行われている刑務所内大学であった。ボストン大学の教授によりボランティアによっておこなわれる授業風景だ。

きちんと講義がおこなわれ修了者には学士が与えられる。また、卒業式までが通常の大学と同じように角帽でガウン姿でとり行われているのだ。受講者の一人は刑務所でプラトンの本を読むのは皮肉だが大学のカリキュラムの中に数多くの興味を発見したといっている。日本ではよく先生が授業時間の大半を黒板にむかい生徒が先生に黒板に書いたことを書き写させたり、生徒に赤鉛筆と定規を出させて、教科書の大事な部分に線をひかせることがあるが、こうした授業は事前に生徒がその内容に興味を持ち、自分なりの理解を持った上で、先生の考え方と自分の考え方を比較するところに意味があるように思えてならない。アメリカでは、黒板に書くかわりに先生のノートのコピーを事前に配布して、授業ではその内容を順番にディスカッションすることに時間を当てるケースが多いがこの方が合理的に思えてならない。

また、私は経済を学ぶための前提として、経済学に適した知能があるかを判定する大学入試も意味があるのか、学ぶ興味を持たすことそして興味を意欲につなぐことも大学教育の一部であると思う。学びたい人には広く門戸を開き、学ぶ機会を持てない人に他の多くの異なった生き方についての選択を提供していくのが、本来の教育のあるべき姿だであろうし、また人生における充実感なりを学ぶことの価値にの中に見い出させ、他人から見れば努力と見られるようなことを人生の一つの満足感を

手にする手段としてインターンシップなどに参加して、日常生活の中に取り込んでゆくことが生きるということと考える私の考えは間違えなのだろうか？